

社会倫理研究所NEWSLETTER

社会倫理研究所ニューズレター

第5号 | 2004年3月・4月

■CONTENTS | 学界展望 | 社倫研ニュース | 懇話会オンライン | 懇話会報告 | 【不定期連載】 あんな本・こんな本 |

【学界展望】 シンポジウム参加の感想

M. シーゲル (社会倫理研究所第一種研究所員)

「人間の安全保障—正義と平和の促進のために」というテーマで、国際シンポジウムが上智大学社会正義研究所と国際基督教大学社会科学研究所の共同主催で2003年12月14日に行われた。二つの研究所の共催による23回目の国際シンポジウムだった。

シンポジウムの趣旨説明では「従来の国家安全保障中心の論理から、個々人の生命・財産・価値観・人権を尊重する『人間の安全保障』の考え方・施策が国連はじめ各国の指導者にも、市民社会にも真剣に認識されてきている」と述べてあって、国連決議に基づく『人間の安全保障』委員会が取りまとめた『人間の安全保障』報告書(2003年5月)を中心に議論を進めることをシンポジウムの目的としていた。

基調演説は平和学者のヨハン・ガルトゥングによるものだった。その他の後援者は大阪教区の池永大司教、欧州安全保障協力機構紛争防止センターのフレデリック・シラー、国際基督教大学社会科学研究所長の植田隆子、国連大学副学長のラメシュ・タクル、上智大学の大学院生のアガスティン・サリ、国際基督教大学の大学院生の小塚千雪、およびイエズス会社会司牧センター長の安藤勇だった。

シラーは紛争防止センターのさまざまな経験を述べ、その上に平和維持のいくつかの条件を述べた。信頼及び信頼が可能になるための仲介と透明性の成立、あらゆる軍及び警察組織が民主主義的機関のもとにおかれること、軍需産業の抑制及び兵器の不拡散などの必要性を強調し、これらの考えを基本とする欧州安全保障協力機構の規約と紛争防止センターの活動方針について述べた。

アガスティン・サリは人間の安全保障は国境や領土ではなく人びとの保護に焦点を当てるために広範囲の暴力だけでなく、地域レベルの小規模の紛争や不正もその領域に入ると述べ、インドのグジャラットで生じた暴動のことを話した。アガスティンの発表は

責任追及に重点を置いたように思ったが、ガルトウングの話(後で紹介する)に出た考えを参考にすれば、むしろ、和平を求めるには、それぞれの当事者が持っている目的に焦点を当て、それぞれの善をよりよく知り合い、それを理解し合うための基盤とするのが和解を築くためにより効果的な方策である。

ラメシュ・タクールは平和研究と安全保障研究を区別し、安全保障研究は国家安全保障に仕向けられ、国際関係のすべてが利害関係のぶつかり合いだということを前提としているのに対して、平和研究は人間の安全保障に注目し、人間同士の和解、総合理解、協力の可能性を信じるものだと述べた。人道的介入のことにもかなり言及した。国際紛争による死亡者の数より、自分の国の政府に殺される人の方が四倍も多いと述べ、人道的介入の必要性を訴えると同時に、その難しさについても語った。実際にひどいことが行われているときは何もしていないで結局加担することになるが、国連で何かしようとする決断のプロセスが麻痺してしまう場合がある。かといって、単独で行動を起こすと非合法的なものになる可能性がある。「人道的介入」という言い方にも問題点を指摘し、主権との関連を認識した言葉だと説明した。「人への責任」が重要な概念であり、人道的介入の根拠であると述べた。人道的介入の必要性と難しさはタクールが述べたとおりだと思う。反面では理想に燃えて人道的な行動を起こして、その反面では自分の利害関係が絡んでしまっている場合が多いように思う。シンポジウムでも何度も指摘されたことだが、現在の国際法で武力行使が認められるのは侵略に対する防衛の場合と国連の決議の下で行う場合のみである。それが大切のように思う。

小塚千雪は「人間開発」と「人間の安全保障」という二つの概念を比較し、人間開発は教育や収入に関する機会の平等を課題とし、「人間の安全保障」はその人間開発を脅かす要因に注目するのだと述べ、その関連で特にアフリカにおけるエイズの問題を取り上げた。安藤勇も貧困や搾取など、人間の開発を脅かす要因を取り上げた。

さて、ガルトウングの基調演説は私自身には一番興味深かった。まず、ガルトウングは「人間の安全保障」という言葉自体に疑問を投げ掛けた。ガルトウングは「人間の安全保障」とは「基本的ヒューマン・ニーズ」に入れ替わる概念だという。基本的ヒューマン・ニーズとは健康的生存、教育、自由、そしてアイデンティティーの四つであるのに対して「人間の安全保障」はその最初の二つだけを目的としているという。

「人間の安全保障」の意味をそのように限定することができるとは言いきれないかもしれないが、ガルトウングのいうことには確かに一理あると思う。「人間の安全保障」は国家の安全保障とよく比較されるが、国家の安全保障に入れ替わったわけではない。

「人間の安全保障」という考えが出たために、国家の安全保障の考え方は毛頭変わっていないだろう。だから、ガルトウングが言うように「人間の安全保障」は、国家の安全保障ではなく、何かの別の考えに取って代わるものだろう。ガルトウングは「安全保障」という単語を使っているだけに、「人間の安全保障」という概念が武力行使を正当化するために利用されてしまうことを懸念しているが、その懸念はまともかもしれない。

そこから、ガルトウングは平和の可能性を取り上げ、特になんらかの衝突が実際にある場合は当事者が目指しているものを把握する必要があると述べ、その目指しているものの中での肯定すべきものを把握し、肯定し、そしてその実現を応援する必要があると述べた。それ以外には根本問題の解決はないだろうという見解も述べた。

なお、肯定すべきでない目的もあると述べた。例えば、米国によるイラク侵略に関しては米国の目的は四つあるという。その四つとは、(1)イラクがイスラエルに対して脅威でなくなること、(2)石油資源に関するコントロール(自分の利権だけでなく、他にどういふ人がアクセスできるかをコントロールするという意味で言っていた)、(3)イラクへのキリスト教の布教活動を促進すること、(4)民主主義と人権の保護と促進という四つである。そこで肯定すべきなのは四番目だけだと述べた。

その四つに関して、ガルトウングは的を射ているように思う。イスラエルのことや石油のことは周知のことであるが、ブッシュ政権と福音派の原理主義者の関係も深いものであり、反テロ戦争にはイスラム教の原理主義とキリスト教の原理主義の間の争いだという色合いもあると私も前から思ってきた。ガルトウングは他の当事者の目的を次のように解釈する:

イギリス：米国とのよい仲を保ち、また利益に与かること

フランスとドイツ：米国からの独立とヨーロッパの統一

イラン：イラクのシーア派と連帯を保ちながら米との関係を悪化させないこと

トルコ：クルド人の国家の成立を阻むこと

サウジ・アラビア：できるだけ自分に世界の注意を引かないこと

ガルトウングはイラクに平和が可能だと考えている。しかしそれが成立するには全国で一つの民主主義国家を作るのではなく、三つの自治区(クルド人、シーア派、スンニー派のそれぞれの自治区)を設け、各自地区で民主主義的体制を作り、その上に連合政権を設置するというのが彼の案である。それが平和につながる唯一の道だという。私はイラクに限らず、植民地時代の後遺症として互いに不仲になりやすい多数民族から成り立つ国の多くで役に立つ考えだと思った。人間が持つ社会的アイデンティティとその人が実際に所属する社会をよりよく調和するために有効なあり方のように思う。

平和の可能性を強調する意味で、アラブ圏の世論調査の結果を述べた。米国の外交政策を憎んでいるかという質問に「はい」と答えたのは84%だったのに対して、米国を憎んでいるかという質問に対して「はい」と返事したのはたったの3%だったそうだ。和解の可能性のあることを物語っていることは明白である。

また、第二次世界大戦以降、米国がさまざまな紛争において殺している他の国の人の数は1600万人にも及ぶと指摘して、米国に対する懸念を示した。特に、1997年に発足したProject for a New American Century(PNAC)のことにも触れた。その発起人には現在のブッシュ政権のチェイニー副大統領、ラムズフェルド米国防長官、およびウォルフオヴィッツ米国防副長官の三人に加えて、ブッシュ大統領の弟のジェップ・ブッシュ(フロリ

ダ州知事)が入っていたからそのグループの影響力は言うまでもない。そのグループの目指すことは21世紀を米国が単一のスーパーパワーである世紀にすることである。

蛇足だが、PNACについて私は名称だけ知っていて、詳しく読んだことがなかったからうちへ帰ったらインターネットで調べた。ホームページはあるが、気になることが山積しているホームページである。

気になったことの一つは「[Rebuilding America's Defences: Strategy, Forces and Resources for a New Century](#)」(2000年9月発行)である。その文書に次の言葉がある(5頁、左の欄、最初の段落):「Further, the process of transformation, even if it brings revolutionary change, is likely to be a long one, absent some catastrophic and catalyzing event - like a new Pearl Harbor」。つまり、PNACが目指している変革は「新たな真珠湾攻撃のような破局的で、大変化を刺激する事件がなくては長い時間を要するであろう」ということである。

9.11事件をブッシュ政権が仕掛けたという意見をたまには聞く。それはありえないと私は思っている。9.11事件には何人かのテロリストが承知で自分の命を捨てている。他の人の政治的権力や経済的利益のために命を捨てる人はいないはずである。命をそのように捨てるには動機は宗教から来るとしか思えない。だから、一般の報道の通りに宗教的な原理主義の上でのテロ行為だったと私は信じている。

しかし、2000年の9月に、現在ブッシュ政権の有力者である人たちが関わっていたグループが真珠湾攻撃のような事件が自分の計画に役立つだろうと発言し、2001年5月に真珠湾攻撃を意識させる映画「パール・ハーバー」が発行され、2001年9月にその注文どおりの事件がおきて、そしてすぐに真珠湾攻撃が引き合いに出されたというパターンは大変気になる。やはり、9.11事件は世界の成り行きを一変させたものであり、その事件とブッシュ政権の対応は徹底的に研究されなければならないと思う。さてシンポジウムに話を戻すが、参加者全員を大いに笑わせたガルトウングが語った笑い話を伝えて終わりにする。笑い話は次の通りである。

ある人が死んで天国に行った。天国の門で聖ペトロとおしゃべりしている。そこにでかい部屋があって、その部屋にもものすごい数の時計があった。それを不思議に思って、その人は「あの時計は何ですか」と聖ペトロに聞いた。聖ペトロは「それは人のうそを量る時計です」と説明した。一人一人の人間にその時計があって、その人がうそをつくると時計が一秒動くのだということだった。

なるほどと、その人が納得したが、よく見るといろいろな棚があって、どうやらグループ分けしているように見えた。これは奇妙だと思って一つの棚を指して「グループわけをしているみたいですが、例えばこの棚はどういう人たちの時計ですか」と聖ペトロに尋ねた。

「それはアメリカ大統領の時計の棚です」と聖ペトロが説明した。

それは不思議だとその人が思って、その棚の時計を眺めた。よく見ると三つの針とも12時を指したままの時計が一個あると気づいた。「それは、あの大統領が全然うそをつかなかったということですか」と尋ねた。

「その通りです。それはジョージ・ワシントンの時計です。彼は全然うそをつきませんでした」と聖ペトロが説明した。

眺めていると、もう一つの時計は2秒しか動いていないことに気づいた。

「その大統領は2回しかうそをつかなかったということですか」と尋ねた。

「そうです。それはリンカン大統領の時計です。彼は南北戦争を開始したときと終了した時だけにうそをついて、そのほかにうそをついていません」とまた聖ペトロが説明した。

今度、その人が棚の時計の数が一個足りないことに気づいた。大統領は43名いるのに時計は42個しかない。それはどういうわけかと聖ペトロに尋ねた。

聖ペトロは「そうなんです。時計の一つはここにありません」とうなずいた。そして付け加えた:「現在のジョージ・ブッシュの時計はここにありません。それを悪魔が借りて地獄へもっていたんです。そこで扇風機として使っている!!!!」

大量破壊兵器などのうそをねたにした冗談ですね。でも地獄で扇風機として役に立つほど回っているということだからものすごくうそをつきまくっていることになる。まあ、それぐらい回るだろう。

社倫研ニュース

『社会と倫理』第16号が刊行されました。今号から、「講演」という新しいカテゴリーが追加され、懇話会での講演をオンラインだけでなく『社会と倫理』でも読めるようになりました。→[目次](#)

入手を希望される方は、[刊行物残部情報](#)をご覧ください。

また、このニューズレターも今号より、月刊から隔月刊へと変更いたしました。次号第6号は、5月頃発信の予定です。

懇話会オンライン

今回は、広島大学法学部教授の甲斐克則先生のご講演「[先端医療技術をめぐる生命倫理・法と「人間の尊厳」](#)」をお届けいたします。



去る2月21日(土)、南山大学J棟1階特別合同研究室にて、本年度第6回懇話会が開催されました。講師に信州大学医学部保健学科の玉井真理子先生をお招きして、「報道されていない二つの出生前診断問題」というタイトルでご講演をいただきました。

この「ふたつの」出生前診断問題とは、日本産婦人科学会に現在申請中の着床前診断の事例と、総合科学技術会議生命倫理調査会の中間報告

「ヒト胚の取り扱い方に関する基本的考え方(案)」における着床前診断についての記述のことです。このふたつの事例の検討を通じて、従来、生命倫理的な難問とされてきた

「出生前診断(着床前診断を含む)」問題に関する実質的意思決定が進行しつつあることが浮き彫りにされました。また、妊娠期の超音波画像による胎児の健康診断と出生前診断とが限りなく接近している事態や、不妊治療の際の着床前診断に伴う様々な問題が指摘され、生命技術のもたらす社会的インパクトがリアルに提示された講演会となりました。(文責 | 小林)



【不定期連載】

こんな本・あんな本 第4回

『脱学校の社会』イヴァン・イリッチ (東洋・小澤周三訳) 現代社会科学叢書, 東京創元社, 1977年, 1100円.



授業の資料のために調べていたら、2002年の12月にイヴァン・イリイチが亡くなっていることを半年以上もたって知った。迂闊だった。ピエール・ブルデューが死んだのが2002年の初めだったから、学校教育の二大批判者?が奇しくも同じ年の始まりと終わりに死んだことになる。変な寓意を読み取るのはくだらないと思うが、ともあれ2002年はそういう年として記憶にとどめられることになるだろう。

イリイチの著作の多くは、絶版にならずに今でも読まれているのではないかと思う。イリイチの著作の中でももっとも有名なこの『脱学校の社会』を「忘れられた本」としてこのコラムで取り上げるのは趣旨に合わないかもしれないが、それでもこの本が1980年代にもっていたセンセーショナルなオーラは、忘れ去られているのではないか。

思えば、私がイリイチから遠ざかったのは、『ジェンダー』(原著1982年; 邦訳1984年, 岩波書店)の頃からではなかったか。その前著で、同名論文を含む論文集『シャド

ウ・ワーク』（1982年、岩波書店）は、「影の経済」に属する、支払われない労働を取り上げた点で、印象的であった。これは、すでに家事労働フェミニストたちが主張していたことを、初心者（当時の私のことだが）にはややとりつきにくいフェミニズムという文脈から、よりわかりやすい、より広い（これも当時の私にとってそう思えたということだが）問題圏へと移してくれたイリイチの腕前によるところが大きかった、と今にして思うのだが、その一方で、やや受け入れ難いような概念が前面に出てきた印象を受けたのだった。「ヴァナキュラーな価値」然り、訳者によって「生き生きとした共生」という訳がつけられた“conviviality”という用語然り。本当にこんなものが理想になりうるんですか？ということで改めて考え直してみれば、まあ確かにイリイチは、大体一貫して、近代の諸制度がもたらした弊害から、近代以前の「生き生きとした共生」「ヴァナキュラーな価値」に回帰したいような口ぶりだったな—、と思わざるを得ず、そのことは『ジェンダー』のような著作によってはっきりしたのだった。実際、この著作がイリイチの評判を落したのではないか、と思われるほど、イリイチの議論は「現代思想」論壇からは消えていき、一部の熱心な（エコ系の？）の支持者を残すのみとなってしまったのだ。

しかし、この『脱学校の社会』では、そうしたエコ系・前近代回帰系のイリイチよりも、社会の批判者としての姿が際立っている。イリイチは、いわば近代社会がかけられた「学校」という呪術からの解放を主張しているのである。学校は、「学校に行かなければ学習ができない」という神話を生産する。その一方で、「学校においておこなわれていることは教育である」という神話も作り出し、これらが一体になって、近代人に呪いをかけるのである。こうした呪術を、変に相対化したりせず、社会の内側から転覆しようとする意図がこの本には満ち満ちている。このような1960年代的エートスを強く残していることもまた今となっては魅力である。学校を打倒した後どうするか、という難問を突きつけられて、その解決策として語られる「ラーニング・ウェブ」というのも、字面だけ見るとインターネットのことかと驚くが、なんのことはない（失礼）学習希望者と教授提供者との物々交換的なシステムのこと、当時としてもしよぼいもので、この破綻もまた豪快なのである。こうした現実性も何もない社会批判の姿勢は、60年代文化、特にロックからパンクに受け継がれたものによく似ている。私は、この時期のイリイチから『ラスト・ネヴァー・スリープス』以降のニール・ヤングを連想してしまうのだけれど、わかる人だけわかってください。

しかし、イリイチとしてはこのアイデアに、本気で現実性をもたせようと思ったようで、そういう方向に私などは付いていけなくなった。本書は確かに近代や近代社会を、第三世界や前近代や民衆の側から見ようとする視点を有していて、そそっかしい人はポストコロニアル的な書物だと言ったりするかもしれない。しかし、イリイチもまた第三世界や前近代の方へ足場を移しすぎたのだ。『脱学校の社会』の最大の魅力は、近代社会を近代社会の内側から批判して革新していこうという姿勢だった。イリイチの学校批判を継承したその後の学校研究者は、歴史的な批判というスタイルを、それだけを継承してしまった。こうしたフォロワーの研究は結局、学校制度の歴史的相対化ということから一歩も進むことができなかった。学校を近代社会の外から批判するのはもうたくさ

んなのだ。

現在も、学校教育内部で生じる問題について、呆れるほどの膨大な言説が垂れ流され続けられている。けれども、そこでは、もはや学校を廃止するという選択肢が考慮されることはない。ある新聞は、彼の死亡記事のなかで、イリイチは混迷する教育に対してあまりにかけ離れているという理由で評価されなくなった、と報じている。しかし、学校は自らの批判者を葬り去りながら、依然として「学習障害」や「多動性障害」のような、そもそも学校が存在しなければありえなかった概念と、その対象と、イデオロギイ的支持者とを産み出しながら、自らの正統化を図っている。イリイチの夢物語的な解決にこの本を笑い飛ばすのではなく、次の文章で指摘される学校の魔術的な潜在機能、現代社会における機能不全、そして社会的富の不公正な配分の問題に、いま一度耳を傾けるべきではないのか。

「年齢に制限のある義務的な学習のための制度がなくなれば、「子供時代」というものは創り出されなくなるであろう。...学校が廃止されれば、青年期と若者時代を通して、幼児、大人、および老人に比して子供に有利になっている現在の差別をなくすることもできるだろう。...まだ自らの意欲で学習することは十分できるようにはなっていない年齢層の者に、教育の資金や人材を有利に配分するように社会が決めていることは、将来ふり返ってみた場合、奇妙に思えるであろう。／制度から得られた分別によって、われわれは子供には学校が必要だと考える。しかし、この制度から得られた分別それ自体が、学校の所産である。」 (62-63頁)

目次

- 第1章 なぜ学校を廃止しなければならないのか
- 第2章 学校の現象学
- 第3章 進歩の儀礼化
- 第4章 制度スペクトル
- 第5章 不条理な一貫性
- 第6章 学習のためのネットワーク
- 第7章 エピメテウス的人間の再生



(第4回担当 | 加藤隆雄 社会倫理研究所第二種研究所員
専門：教育社会学)